



私の愛誦歌

雑誌「短歌」の昭和四十七年一月号の巻頭に、新春作品特集として、宮柀二先生が「一歳抄」と題して六十三首の短歌を発表された。この時、宮先生は満五十九歳であった。六十三首は「雑詠一」から「雑詠六」までに分けられていた。「雑詠一」は、

眼薬がんでくさを注さしつつ聞くはストーブの
炎が燃ゆる静かなる音
若き日のかの苦にがかりし孤独より蘇
で始まっており、「雑詠六」は、
るなく日に日に老いき
で終っている。

先生の静謐な心情が伝わる作品群であり、一読して深い感銘を受けた。当時私は東大医学部の学生であった。大学紛争があり、昭和四十四年一月には

全共闘系学生と機動隊による安田講堂の攻防戦があつたりして、私は憂鬱な学生生活を送っていた。学生生活であるから、それなりに楽しいことも多かったのであるが、私の心の底には青春特有の鬱屈とした思いが常によんでいた。そのような時に、宮先生の「一歳抄」という連作を読んで心を打たれたのである。その「雑詠三」の中に、

青澄みて宵空深し心どの孤りをわ
れとわが覗き見る
という歌があつた。これを読んだ時、私は、あつ先生が私の気持を詠んで下さつた、と思つた。孤独感を自分で覗き見するという私自身の行為は、自分では表現できずにいたものであるが、それを先生が詠んで下さつた、と感じた。心から共感した。私は嬉しかった。

これ以降、「青澄みて宵空深し」の歌は私の愛誦歌となり、折に触れて思い起こす一首となつた。

宮柀二先生は、昭和四十七年に歌集『藤棚の下の小室』を、昭和五十年に歌集『獨石馬』を出版された。『獨石馬』には昭和四十一年から昭和四十七年までの短歌と長歌が収められている。私が先生に入門した時期の作品が収められているので、『獨石馬』は殊に懐

かしく読んだ。ところが、「青澄みて」の歌が載っていないのである。前後の歌は雑誌「短歌」に発表された時とほぼ同じなのであるが、「青澄みて」の歌は、

宵空の青くし澄めば心どの孤りを
覗き見る思ひする
となつていた。

詩歌を作る上で推敲が重要であることは言うまでもない。宮先生は、『獨石馬』を出版するにあたって、沢山の手直しをしておられる。例えば「眼薬がんでくさを注さしつつ聞くは」の歌の初句は「眼の薬」に替えられ、

眼の薬がんでくさ注さしつつ聞くはストーブの
炎が燃ゆる静かなる音
になつている。

先生の歌の初出の時と歌集に出版された時とで推敲が加えられているものを比較して読むことは、これほど勉強になることはないだろう。しかし、「青澄みて宵空深し」の歌が「宵空の青くし澄めば」という歌に変わっているのを発見した時、私は、残念と云うか、意外と云うか、大切に思っていたものが無くなってしまったかのような感情を抱いた。

私個人としては、

青澄みて宵空深し心の孤りをわれとわが覗き見る

を、愛誦歌としてやはり今でも大切に抱き続けているのである。

(浦部 晶夫)

当直の夜

今の職場の健康診断は、健診専門機関が出張して実施してくれる。仕事を休まずに受けられるのは助かる。先日も年に一度の健康診断があり、検査技師や看護師がやってきて採血や視力、心電図などのコーナーを手際よく作り、健診が始まった。

検査を一通り済ませ、最後は医師の問診である。今回の担当医には見覚えがある。歳をとられ風貌はだいぶ変わられていたが、名札でフルネームを確認したので間違いない。私が就職した最初の職場、市立病院の外科医だったT先生だった。

こちらから挨拶したが、先方は私のことを覚えていなかった。それも無理はない。再会といっても四十年近く昔のことだし、当時私は新米の事務員だった。でも私は先生のことをしっかりと覚えていくつかのエピソードと

ともに。

T先生は私が苦手とするタイプの人だった。消化器や乳がんの手術が専門で、声も体も大きく、長髪を振り乱しズケズケものをいう先生だった。個性が強く、一匹狼的なところがあった。

ある日、病院の庶務課にT先生がやってきてすごい剣幕で先輩の職員に喰ってかかった。内容は忘れてしまったが、何らかの事務ミスを責めていた。先輩が謝ると、「事務は謝れば済むから良いな。俺たちはミスしたら患者の命がなくなる、訴訟になるんだぞ」と言い放って出て行った。

そんな先生も八十歳になれば、自分でも円くなったと言っておられた。問診のブースの中でT先生に、私が今でもはつきり覚えているある当直の夜の次のエピソードを伝えた。

当時この病院では毎週金曜が輪番制二次救急応需の日で、事務員の私も時々事務担当が回ってきた。当時私は独身でお金も稼がたかったから、家族持ちの先輩に代わり、当直をちよくよく引き受けていた。

ある当直の夜の事である。お腹が痛いらしく、大泣きの状態で一人の赤ん坊が運ばれてきた。泣き声が廊下に乗

で大きく響く。最初に患者を診る研修医では手に負えず、病棟の外科当直医をナースが呼ぶ。降りてきたのはT先生だった。腸捻転とみてとると赤子のお腹を上から指でつまんで直した。あれほど大泣きしていた赤ちゃんも会計を済ませる頃にはニコニコ笑って帰っていった。その当夜の鮮やかな仕事を、健康診断の問診のブースの中でT先生に伝えた。「そんなこと、あつたっけかなあ」と先生は笑っていた。

T先生のことを知らない他の職員は、「今日の先生、ずいぶんおじいちゃんだったね」などと話していた。

今私は小さな福祉施設に勤めている。そこではデイサービスを実施している。私たち職員は利用されるお年寄りの今の年老いた姿が見ていない。利用者の方々にも壮年期には仕事や商売でバリバリ活躍していた頃があり、子育てや家事に尽くされていた頃があったはずだ。そうした姿を想像しながら明日から接してみよう。(人見 江一)

保護猫アシユレ

一人住まいのなぐさめに猫を飼いたいと思つた。でも年を考えたら、今か

ら子猫を飼えば猫に看取ってもらうことになってしまふ。それで考えたのが、保護猫だ。大人の猫を飼おうと譲渡会に行つてみた。可愛い子猫が沢山いる中に、一寸育つた猫をみつけた。私が飼えなくなつた場合、娘がひきとつてくれるという条件で、まずトライアルでその猫は来た。

はじめは警戒して、本箱の上やテレビの後ろにかくれてしまい、餌も食べない。でもトイレは失敗せずきちんとする賢い猫。アシユレと名付けなつてくれるのを待つ。

三日め、椅子にすわつていた私の膝に片手をのせ「ムヤーツ」と甘えた声を出した。すかさずだつこして膝にのせると、逃げるかと思つたのに、喉をゴロゴロならしてじつとしてゐる。心を開いてくれたと嬉しくなる。餌も食べるようになり、夜もそつと私の布団にもぐりこんでくる。可愛い。

でも馴れてくるといたずらもするようになった。サイドボードの上にあがり飾つてあるものを下に蹴落したり、床柱で爪をいんだり……。猫にとつてはあたり前のことも知れない。でも私は飼うことに自信をなくしかけて来た。

私が留守をする時、「ムニャー」と淋しげな顔で見上げる姿をみると、外に出しても気が気でなかつた。

私が飼えなくなつた時、娘がひきとつてくれるといつても、娘の家にはシエルティ犬がいる。二匹の相性がよくなければ駄目だと、犬と会わせてみることにした。娘と孫が犬をわが家につれて来て、孫が犬を抱き、娘がアシユレを抱き、一メートル位間隔をあけて対面させたところ、アシユレは「ギャア」と叫んで娘の腕からとび出し、テレビの後に逃げ込んでしまつた。そして娘達が犬をつれて帰るまで出て来なかつた。やはり無理なのか？ もし飼えないならば、お互いにこれ以上情が移らないうちにお返しした方がよいと思ひ決心し、その旨を伝えた。

二週間のトライアルであつた。係の方が迎えに来て、かごにアシユレを入れると、中から手を出して何故？ というように「ミャア」と鳴く。私は涙をこらえて「飼つてあげられなくてごめんなさい」と心で詫びた。

アシユレが去つた夜、アシユレの為に用意した餌を入れるお皿がポツンと残つてゐるのを見て涙が出た。膝にのつて来た時のぬくもり、布団の中で

鳴らしたゴロゴロという喉の音が忘れられなかつた。アシユレの信用を裏切つたことが悲しい。今はただ、次には家族の大勢いるあたたかな家庭にもらわれていくことを祈るばかりである。

アシユレはわが家の床柱と私の心に爪あとを残して二週間であつた。

(新井美穂子)

術中に虹を見た

二〇一八年晩夏の草刈り後、眼に異物混入の痛みだと訴えて緊急受診。両眼とも、眼圧が正常の三倍もある異常な高さで、眼球内の水分過多が原因と云う。白内障もあるため、三ヶ月ほど点眼薬に副作用ありの内服薬まで併用したが、年末でも効果なく、緑内障予防のため手術と決定。設備の整つた眼科に紹介される。

手術の目的は、眼圧を正常に戻すために眼球からの水分の出入りをスムーズにする、つまり詰まつた管の切開、白内障のための人工レンズ装着。

入院初日は、受付もそこに部屋で術前説明を受け、渡されたのは尿漏れ用パンツ。以前手術中に失禁した人があり、念のためとのこと。

着替えのあと軽い麻酔注射後、手術室前で待機中に血管確保の点滴開始。

手術室準備が完了して、看護師が足で軽くドアを蹴った（ように見えた）らドアが開き、患者も点滴セットも中の看護師にバトンタッチ。

理髪店の椅子そっくりで肘置きありの重役椅子に座つたら、スリッパを脱がされ、左腕は肘置きに固定。血圧計、脈拍計が取り付けられる。点滴は右腕なのでそのまま固定される。そして首から下には薄い布、顔には先に手術する左眼部分に穴がある、防水布らしき物がかかり椅子が少し倒された。顔の上には、自動車運転免許更新時の視力検査機器を下向きにしたような機械が固定された。双眼の顕微鏡がついていよう。あまり大きくはなくて、端の隙間から医師の顔がちらちら見える。準備万端整って「麻酔をかけますよ、眼を開けて」の声があり、注射でなく、点眼薬による局部麻酔。だから眠っている間に済むものではない。麻酔が効いたら睨まできないようにまぶたを固定すること。

これからが手術本番。

手術では、「右を見て」とか「左を見て」と眼球の移動を指示される。術

野を見やすくするために、患者に動作を指示することができる対話が必要なので、全身麻酔でない理由がここで理解できた。

術中も意識がはつきりしているため「洗いますね」と眼に水を流されると、術野照明の光が水（たぶん蒸留水）を透けて見える。透明なはずなのに薄い虹のような五色くらの水流になり、不規則に形を変えるから不思議だ。

もう一方の手術時の「洗い」では、水流が長方形の枠をいくつもいくつも連ねたように色が変化して流れた。

これで手術終了。機器がはずされスリッパも履かせて貰い、看護師に手を引かれて帰室。ただ、点滴はそのまま終わるまで続ける。この日は午後の手術待機患者があるらしく、手術に特化した日。所用四時間で痛みは点滴針を差すときのチクリとした一瞬だけ。術後も痛みを感じることは皆無だった。麻酔薬・麻酔技術恐るべし。

午後一時には病室にいて、昼食は部屋で。時間ずれにもかかわらず、熱い物は熱くして提供される食事。この日は朝食抜きということもあったが、炊きこみご飯が真にうまかった。入院中の二週間、毎回おいしく完食。時々朝

食にトーストが出た。私ではないが、どうしても食べられないという患者に、次の時には白むすびが添えてあった。

手術した目は眼帯がしてあるが、夕食前には除いて、透明プラスチック製の保護具を装着。就寝中に目をこすらない配慮とのこと。一週間後の右眼手術後は、そのまま右眼にも装着できる設計にしてある。度も縁もない眼鏡をかけた状態。

窓から見る外の景色がまぶしく輝いている。こうして一週間が過ぎ、右眼を手術した。こちらは少し軽い症状だそう、左眼の半分ほどの所要時間だった。

二週間で予定通り退院し、後は定期的にチェックに通院することとなった。今のところ順調に経過し、視力は裸眼で一・二と一・〇になって近眼鏡不要。

二〇二一年の自動車運転免許更新にそなえて、認知症検査や実技講習が済み、交付待機中。傘寿の年を体調管理につとめ、過疎地生活にそなえよう。

(山本 寛嗣)